



Vol.32

ゆうことみゆきのふくふくトーク

# ソノコ de ソノコ

アイヌ文化にどっぷり浸って生きてきた  
本田優子(札幌大学副学長)と  
村木美幸(アイヌ民族博物館専務理事)が、  
その魅力をソノコ(=お便り)形式で  
語り合います。

イラスト/安田千夏

## イヌイエ(彫刻)



アイヌの彫刻といえば、生活の中で造られてきたさまざまな道具類であり、それら道具に丹精込めて施される繊細で力強く、美しさが際立つ彫り文様ですよね。

優子さん、先日、初めて根室の納沙布岬に行ってみました。何を唐突に言い出すのかと思うかもしれませんが、目の前の鳥影を見ながら、その先に続く島々に暮らした千島アイヌやエトロフの名工といわれたシタエホリの名前が浮かんだの。

シタエホリはシタエーパレとも紹介される、エトロフ島のナエホに住んでいたアイヌ。当アイヌ民族博物館にも東北下北半島で収集されたシタエホリの作品が収蔵されています。「北海道土人細工 會席膳 五人前」

と墨書きされた木箱に入った五枚の盆。盆の表面には花弁や実、葉、蔓などの植物、短冊などを模した美しい彫り文様が施され、裏面には「エトロフ住 シタエーパレ造」と彫られているの。

幕末の探検家、松浦武四郎の著『近世蝦夷人物誌』(二八五八年)の現代語訳版に彫物師シタエホリについての記述が。「…一挺の小刀で彫物を楽しみ、…ひたすら、盆、碗、さじ、ひしゃくなどを作っている。物好きな人がたのめば、筆筒、筆管、小刀の鞘なども作る。その彫物の巧みさは、まことに比類がない。何ともふしぎな名工である…。」

一本のマキリ(小刀)から表現されるシタエホリの独特な彫りの世界、本当に惚れ惚れする作品が多いんだよね。優子さん、「名工シタエホリ」知っていますか？



もちろん知ってますとも。技のすごさだけでなく、きれいな花模様も特徴的だよな。アイヌの木彫りって抽象的な地模様が多いけど、シタエホリ

のトレードマークといえるのはトリカブトに似た花。可憐で本当に素敵です。

それにしても、アイヌの

シタエホリ  
イヌイエ  
を学ぶ



彫刻家の友人たちがよく言うの。「昔の人たちにはかなわない。今はいろんな種類の良切れる刃物があるけど、昔はシンプルなもの一本。それでいて、あんなすごい作品を残してる」って。だから、昔の作品をじっくり観察して技を研究してるんですって。

ところで、昨年、二風谷で作られている「イタ」(木彫りの盆)が伝統的工芸品(伝産品)に指定されたよね。全国ではとくに二百を超える品目が指定されているのに、北海道にはこれまで一つも伝産品がなかったの。というのは、指定のためには、その工芸品が百年以上前から作られていて、しかも今でもその地域に一定数の作り手が存在すること等、いくつもの条件をクリアしなければならぬから。でも、江戸時代の文献記録などからもたくさんさんの証拠を揃え、めでたくこのたび指定されました(拍手)!!

でも一方では大きな問題が…。現在、プロの彫刻家として生きているアイヌの若者たちは本当に少ないの。良い腕を持つ若者は少なからず存在するのに、販路の問題などから、なかなか食べていけないのが現状。伝統の技を途絶えさせないために、私たちが知恵を絞るのは…今でしょ!!

※「アイヌ人物誌」(一九八二年)共訳 史料源蔵 吉田豊

■本田優子(ほんだゆうこ):金沢市生まれ。札幌大学副学長。北大卒業後11年間平取町二風谷に住み、アイヌ語講師を務める。  
■村木美幸(むらきみゆき):白老町生まれ。アイヌ民族博物館専務理事。先住民族アイヌの一員として文化継承活動に努める。  
■安田千夏(やすだちか):神戸市生まれ。元アイヌ民族博物館学芸員。現在は同館でアイヌ若手育成事業の自然講座講師を務める。